

トルコ旅行記 (2022/11/22~30)

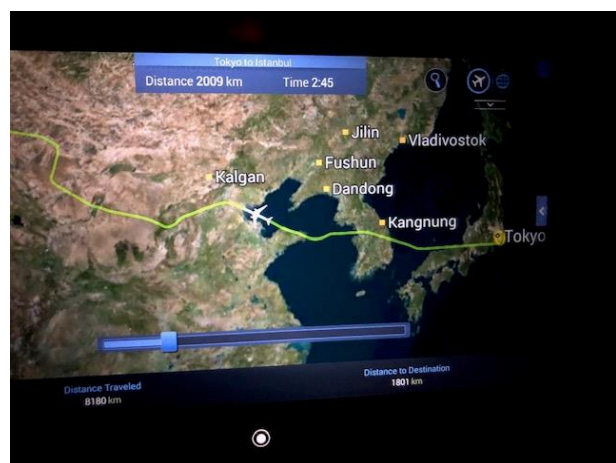
トルコは初めての訪問国である。武漢で発生した新型コロナウイルスが世界に蔓延して早3年が経過した。欧米ではインフルエンザと同様な対応に変化し日本もやっと渡航規制を緩和した。ツアー一名は『羽田発イスタンブール海峡クルーズと世界遺産歴訪9日間・直行便トルコ航空指定』で、主催する旅行社は「ターキッシュ アンド トラベル」というトルコ航空の関連子会社だった。渡航前に家族から心配する声もあったが全くの杞憂に終わった。今回は2年半振りの海外渡航で且つコロナ対応義務もあり面倒な手続きもあったが、旅行中のサッカーワールドカップ観戦と熱気球乗船など思い出に残る旅行となった。

1. 渡航準備と羽田空港 22時 (22日)

コロナ対策としてワクチン3回以上の接種証明が日本帰国の際に必要な。既に5回接種していたが、その証明はスマホに登録されたものだった。しかし旅行中スマホが作動しないことを考慮して印刷証明書も用意した。横浜市の案内に従いコンビニのセブンイレブンで印刷出来た。なおトルコへの入国時には何の証明書も要らない。

事前準備として東京ジャーミー(代々木上原にある巨大なモスク)を見学した。土曜14時半に訪問し施設案内とイスラム教についての解説を受けた。この施設は戦前に完成したが20年前に改築された。(写真参照)

22日22時50分発のトルコ航空のチェックインは長蛇の列だった。400人近い収容の飛行機はほぼ満員だった。搭乗後まもなく食事が出たが夕食だったので水だけ飲んで寝た。数時間後に起床したが周りの乗客は就寝中だった。トルコ航空はスターアライアンス加



盟メンバーだった。機内の画像サービスは満足のものだったので映画を3本観た。機体の飛行行程がわかるナビゲーション画面がよかった。羽田から韓国、中国、中央アジア経由してイスタンブールまでほぼ直線進む行程だった。(写真参照)

因みに欧州への行程はロシア上空が不可の為、3時間長くかかり航空料金も3割高とのことだ。本件ツアー料金は燃料サーチャージ込みで安かった。到着2時間前に2度目の食事が出た。イスタンブール空港には翌朝6時半に到着した。

到着してから飛行場内でのバス移動が長く、また入国手続きと荷物受け取りなどで着陸して1時間以上もかかった。空港は巨大で4年前に完成したそう。新空港は市内中心から北の方角にあり、旧空港より2倍以上離れている。参加した団体客は総勢11名だが2名は3日目からのバスツアー

から参加するとのことだ。空港で現地通貨リラに交換をして宿泊先に向かった。

ツアーガイド（以下ガイド）はベテランで流暢な日本語と豊富な知見を持っていた。ガイドからトルコ旅行の概要と注意を受けた。トイレでチップが要ることと盗難についての注意が記憶に残った。イスタンブール空港到着後からマスク着用する人の姿が消えた。不思議な気分と開放的な気分になった。トルコは昨年パンデミックで相当厳しいコロナ対応があったが今年から全面的に解放されておりコロナ感染者についてはニュースにもならないようだ。

2. イスタンブールのモスク群（23日、24日）

イスタンブールは嘗てのコンスタンチノーブルで東ローマ帝国の首都だった。そしてキリスト正教を国教とするビザンチン文化の中心であった。1453年オスマン帝国のメフメト2世がこの都市を征服した。午前中休息して午後から旧市街のアヤソフィア聖堂を見学した。1時間以上広場で行列して待った。ここはビザンチン時代教会だったが破壊されることなくイスラム教のモスクに改造された。イスラム教は偶像崇拝を禁じているがアヤソフィア聖堂の出口には聖母マリア像などの偶像の絵が残されていた。（写真参照）イスラム教ではイエスをアラーの予言者の一人としている。イスラム教はイスラムステイトの蛮行で異教徒への迫害のイメージが強かったが寛容な側面もある事に気づいた。



トルコは1987年にEUに正式に加盟申請している。現在NATO（北大西洋条約機構）加盟国だ。過去20年シリア難民を累計500万人受け入れている。また今年2月に起こった宇露戦争の停戦の外交活動にも積極的だ。

23日の夕食は伝統的トルコ料理のケバブハウスだった。そこでワールドカップの日本対ドイツ戦の様子がテレ



ビ中継されていた。店に入った時、日本は0-1で負けていた。ところが数分後に堂安選手が同点打を入れた。我々は一声に歓声をあげた。そのレストランにいたトルコ人も喜んでくれた。更に数分後に浅野選手が2点目のシュートが決まった時は我々とトルコ人のお客も従業員も一斉に大きな歓声と拍手があった。興奮となんとも嬉しいひと時だった。（写真参照）

ガイドによればトルコ人は日本が好きだそうだ。欧州諸国とはEU加盟申請問題もあるが、99年前の独立戦争で争った歴史もあり複雑だ。

日本は明治時代の海難事故（エルトゥールル号）を学校で習っている。こうした背景から親日であるといわれている。

イスタンブールの旧市街には世界遺産が多く名所旧跡の宝庫だ。

翌日午前中に訪問したトプカプ宮殿はオスマン国王の宮殿だ。4千人が居住し8百人の賄い人がいたそうだ。また宝物殿には宝石と宝剣と鎧兜などが飾られていた。(写真参照)

次にスレイマンジャーミーを見学した。スレイマンは16世紀オスマン帝国最盛期の王だ。その庭園にはラマダン期間中の国王の仮住居もありボスポラス海峡が一望できる。庭園からの眺めは最高だった。(写真参照)



ボスポラス海峡のクルーズも素晴らしかった。約100分かけてガラタ橋から黒海側のスルタンメフメト



橋まで往復した。兩岸の片方が欧州で片方がアジアだ。その先が宇露戦争の舞台である黒海であり、海峡には穀物を載せた貨物船も散見された。黒海の向こうで宇

露戦争中であることが信じられないような平和なクルーズであった。

24日の夕食はオリент急行の始発駅内のレストランだった。駅舎は修理中であったが、アガサクリスティ著の「オリент急行殺人事件」の舞台になった場所だ。歴史を感じさせる写真が多く飾られていた。大正時代の裕仁皇太子(後の昭和天皇)が訪欧時の記念写真が飾られていた。皇太子はその後欧州で半年間遊学された。(写真参照)



宿泊先のヒルトンホテルは新市街の丘の上にあった。朝食はビュッフェスタイルであったが、大変豪華な内容で朝食が楽しみであった。尚トルコはパンの種類が豊富で30近くあるそうだ。(写真参照)

3, トロイとエフェソス (25日、26日)

この日からツアーに2人の女性が合流し、3000キロに及ぶバス旅行が始まった。イスタンブール市街は大変な渋滞だった。イスタンブールは人口1000万の大都市であり、朝の渋滞は日常茶飯事とのことだ。この為地下鉄網建設が急ピッチで進んでいる。

1時間程で市街を抜けると渋滞は解消した。その後はマルマナ海の海岸沿いを西に向かって高速道路を走った。2時間程でダーダネス海峡横断大橋を渡った。この大橋は今年完成した。これでバス運行ツアー時間が大幅に短縮されたようだ。



ダーダネス海峡を渡るとそこはアジアだ。アジア側の都市チャンカレーはトルコ独立戦争最後の激戦地として有名だ。ここで50万人が戦死した。トルコ人は独立戦争の歴史を子供の頃からしっかり学んでいるようだ。

有名なトロイ遺跡はチャンカレーから30分で着いた。ドイツ人のシュリーマンが19世紀後半に発見した遺跡だ。現在トロイ遺跡は海岸から2キロ程離れているが当時は海岸沿いにあったようだ。また遺跡の貴重な芸術品は全てドイツとロシアに運ばれベルリンなどの博物館に展示されている。(写真参照)

翌朝午前中にエフェソス遺跡を訪問した。エーゲ海

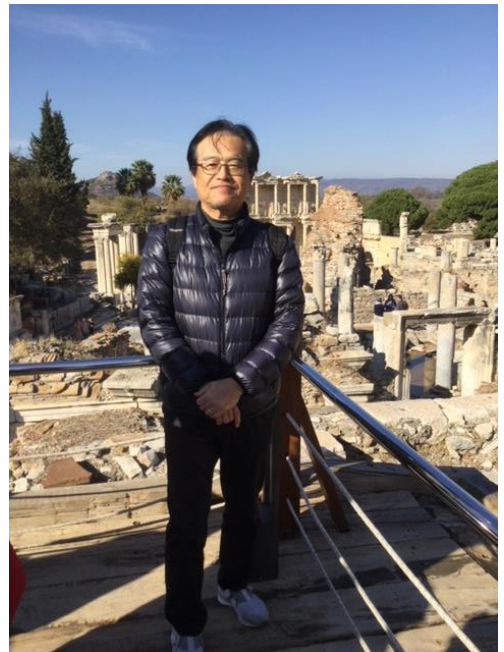
沿いに点在する数々のローマ帝国の遺跡の中で最も保全が良く観光遺産として整備されている。

この遺跡はBC2000年頃のもので壮観だった。(写真参照) ここにはローマ帝国時代の公衆浴場、議会、図書館、公衆トイレ、屋外演劇場、住居などがあつた。

4, パムッカレの石灰棚と温泉プール (26日)

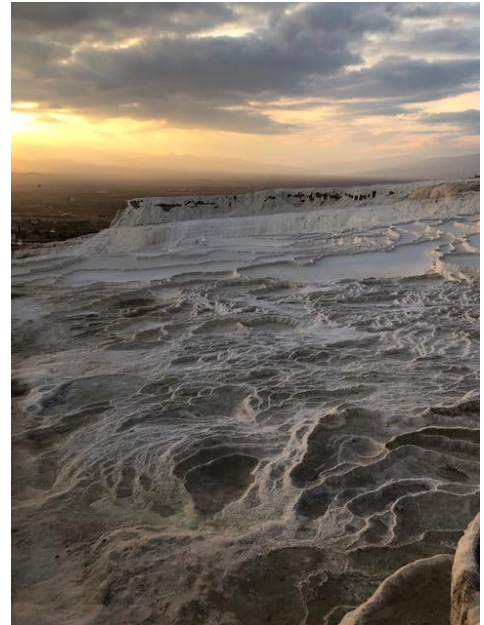
エフェソス遺跡を後にしてトルコ第4の都市イズミールを経由してバスは西に移動した。イズミールは観光資源に乏しいが貿易と商業の街として繁栄している。

夕方日が沈みかかった頃内陸の高原にあるパムッカレに着いた。この地は温泉と石灰棚の観光地だ。温泉が石灰岩を溶かして奇妙な風景を創造している。



この景色は中国の九寨湖に似ている。(写真参照)

この晩温泉プール付きのリゾートホテルに泊まった。ここはリゾート温泉地として親しまれている。長時間のバス旅行で腰とお尻が痛くなりホテル内でマッサージを受けた。また大きな温泉プールも綺麗だった。



5. コンヤとスルタンハン（27日）

翌朝夜明け前にホテルを出てカッパドキヤに向かった。今日も300キロ超の長旅だ。見渡す限りの荒野を走った。牧草が所々あるが殆ど平原と岩山だ。山林は殆ど無い。

途中トルコ第3の都市コンヤに立ち寄った。コンヤは工業都市で外資系企業の工場も多く進出していた。工業団地も造成中だった。

旋舞というダンスに特徴ある神秘宗教の修道院を訪問した。この宗教は法律で禁止されているが1時間以上も回転する舞踊は現存する。



カッパドキヤへの途上ラクダのキャラバン隊の宿舎（要塞機能を合わせもつ）スルタンハンに立ち寄った。シルクロードには30～40キロ置きにこのようなキャラバン隊の宿舎がある。その後更に西に移動して夜7時半頃にカッパドキヤのホテルに到着した。(写真参照) 本格的な洞窟ホテルだった。明日早朝6時半気球参加者のみの集合が指示された。ツアー団体客11人の内8人が参加した。



6. カッパドキヤの熱気球と奇岩（28日）

熱気球観光の実行には政府機関の許可が要る。26日まで2週間中止されていた。幸い天候が良好であり熱気球観光の実施許可が下りた。我々は大変幸運だったということだ。尚気球サービス業者は約20社あり最大160個の気球が飛ぶそう。今回は100個弱飛行した。熱気球を1つ飛ばすに

は 10 人のスタッフが必要で乗船する籠には最大 20 名乗船できる。我々のチームには 16 人の客と 2 人のパイロットが乗船した。同乗した客はインドネシア人の女性 8 人だった。

気球からの眺めは最高であった。インドネシア人が「バグース」を連呼していた。インドネシア語で最高という意味だ。生涯体験したことが無い体験で最高に興奮した。(写真参照)

気球観光は 8 時半に終了しホテルに戻り朝食をとった。



乗船中は零下になることから防寒着を着ていたのが軽装に着替えた。

その後いくつかカッパドキヤの奇岩と洞窟と地下都市など観光名所を回った。

奇岩は火山灰で組成蓄積した岩が雨で浸食されたものだ。奇岩ができるまでの期間はおおよそ 6000 万年。



カッパドキヤは自然という彫刻家の偉大なる芸術作品かもしれない。キノコ岩の帽子の部分は年々雨と風で崩れて亡くなるそうだ。しかし同じく新たなキノコ岩も出来ている。人間のノミで作られた地下と洞窟の住居には驚いた。そこに暮らした数万の人々の生活が想像できた。洞窟生活は前世紀から始まる。古くはローマ帝国軍でその後はオスマン帝国軍から逃れたものだ。キリスト信仰の強さに感動した。この土地をトルコ人は「ギョレメ 見てはならないもの」と名付けた。

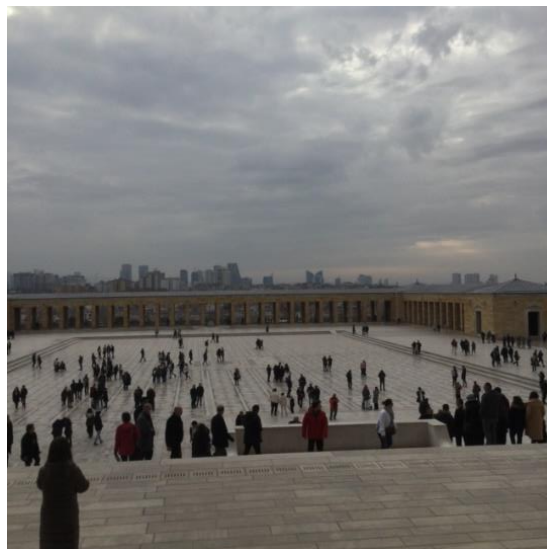
カッパドキヤには今も鳩が多く棲息している。しかし洞窟住居の横に人工の鳩の巣があった。鳩は食用にも成ったが最大の目的は糞だ。今も昔も最高の肥料なのだそうだ。



7. アンカラとケマルアタチュルク (29日)

アンカラは 1923 年に首都となった。当時の人口は 3 万人ほどだったが、安全保障の観点でイスタンブールから移転された。現在トルコ 2 位の都市で人口 600 万人ほどだ。ケマルアタチュルク廟は初代大統領でトルコ建国の父でもあるケマルアタチュルクの棺が安置されている。(写真参照)

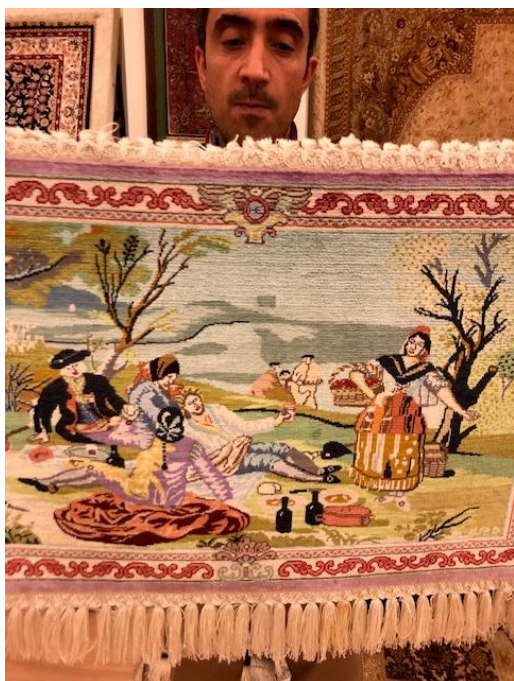
そして建国記念博物館を兼ねており独立戦争の関連するケマルの遺品などが多数展示されていた。霊廟の前は大きな広場だった。(写真参照)



8. トルコ名産品（革製品、絨毯、トルコ石）

旅行中にバザールと専門店見学があった。トルコの名産品は革製品と絨毯と宝石とのことだ。この2年半はコロナパンデミックでトルコ経済も最悪だった。トルコ絨毯は女性が昔ながらの手織りで生産する。パンデミック期間中の従業員の確保で苦労したとのことだ。機械で製造された絨毯もあるが手織り絨毯の価格は数倍高い。床に敷く絨毯の他に手織り絵画も多数販売されていた。(写真参照)。絨毯は嵩張るので日本にある貿易代理店を経由して別送される仕組みになっていた。

また観光業はこの秋から復活して賑わいを取り戻してきたとのことだった。イスタンブールのグランバザールも活況を呈していた。(写真参照)



9, その他感想

トルコは11月から冬に入る。3月過ぎまで春が来ない。例年雪が降る季節だが今年は例外的に暖かいとのことだ。5月～9月が観光シーズンだが7～8月は気温が40度にもなるそうだ。

トルコは農業国だ。しかし高地が多く未開墾された荒野がおおい。気温と水の関係でコメ生産は難しい。小麦、トウモロコシ、馬鈴薯など多く生産している。アンカラの近くにあるドウズ湖はトルコ第2の巨大な湖だ。水深1.5メートルと浅いが殆ど塩で出来ている。トルコで消費する塩の40%はこの湖から生産されているとのことだ。



カッパドキヤのナイトクラブで民族舞踊を鑑賞した。ベリーダンスもあったがクルクル回る演舞が記憶に残った。

インフラ整備が急ピッチで進んでいるので数年後のトルコ旅行ではバスの長距離強行ツアーは回避出来るかもしれない。またいつか再訪したいものだ。

(2022, 12, 10作成)